

仏説阿弥陀經

①



満井秀城
本願寺派司教

無問自説の經——釈尊の本意

今号より、本願寺派司教の満井秀城先生に『仏説阿弥陀經』を解説していただくことになりました。中国の善導大師（六一三—六八二）は、『阿弥陀經』が四枚の紙におさまることから、「四紙經（ししきょう）」と呼ばれました。文字を数えると、一九〇〇字弱、今の原稿用紙でも四枚半ほどの分量です。お経をすべて読むということはなかなか大変なことですが、「この分量であれば何とか」と思われる方もあると思います。是非ご一緒に学ばせていただきましょう。

はじめに

今回から五回にわたって、『仏説阿弥陀經』（以下『阿弥陀經』と略称）を味読して参りたいと思います。

『阿弥陀經』は、『無量壽經』・『觀無量壽經』とともに「淨土三部經」の一つですから、日頃から、親しんでおられることでしょう。同時に、他宗でも、『阿弥陀經』は誦誦されることが多く、分量が大部でないこともあって、日本仏教では、『般若心經』に次いで、よく誦誦される經典だと言われています。

したがって、色んな立場の人が、色んな解釈をされますので、特に注意して拝読せねばなりません。それには、言うまでもなく、宗祖親鸞聖人の読み方にしたがっていくことです。

国宝本として有名な『阿弥陀經集註』では、親鸞聖人の、この經典に対する学習の軌跡をうかがうことができます。そこでは、『阿弥陀經』の本文解釈について、主として善導大師の『法事讚』の文の詳細な書き込みが見られます。『法事讚』には、『阿弥陀經』の註釈を施した部分があり、親鸞聖人は、『阿弥陀經』を、善導大師の見方で読んでいかれたことがわかります。善導

大師の方法論とは、『觀經疏』もそうであったように、阿弥陀仏の本願に順うという「順彼仏願」の視点に徹底することです。この善導大師の姿勢を受け、阿弥陀仏の本願を基準にされたのが、宗祖の方法論と言えます。

よく知られているように、淨土三部經を、阿弥陀仏の本願に沿って、往生の因を誓った「生因三願」（第十八願・十九願・

【註釈本文】 ▼二二頁

仏説阿弥陀經

姚秦三藏法師鳩摩羅什 奉 詔 訳

【一】 かくのごとく、われ聞きたてまつりき。ひと時、仏、舍衛国の祇樹給孤獨園にましまして、大比丘の衆、千二百五十人と俱なりき。みなこれ大阿羅漢なり。衆に知識せらる。長老舍利弗・摩訶目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶俱絺羅・離婆多・周利槃陀伽・難陀・阿難陀・羅睺羅・憍梵波提・寶頭盧頗羅墮・迦留陀夷・摩訶劫賓那・薄拘羅・阿菴樓駄、かくのごときらのもろもろの大弟子、ならびにもろもろの菩薩摩訶薩、文殊師利法王子・阿逸多菩薩（弥勒）・乾陀訶提菩薩・常精進菩薩、かくのごときらのもろもろの大菩薩、および釈提桓因等の無量の諸天大衆と俱なりき。

【現代語訳】 ▼淨土三部經（現代語版）二二七頁

仏説阿弥陀經

姚秦の三藏法師鳩摩羅什 詔を奉じて訳す

【一】 次のように、わたしは聞かせていただいた。あるとき、釈尊は舍衛国の祇園精舎において、千二百五十人のすぐれた弟子たちと一緒であった。これらはみな世に知られた徳の高い阿羅漢であって、そのおもなものは、長老の舍利弗をはじめ摩訶目犍連・摩訶迦葉・摩訶迦旃延・摩訶俱絺羅・離婆多・周利槃陀伽・難陀・阿難陀・羅睺羅・憍梵波提・寶頭盧頗羅墮・迦留陀夷・摩訶劫賓那・薄拘羅・阿菴樓駄などの弟子たちであった。またすぐれた菩薩たち、すなわち文殊菩薩・弥勒菩薩・乾陀訶提菩薩・常精進菩薩などの菩薩たちや、その他、帝釈天などの数限りないさまざまな神々とも一緒であった。

■経題

経題の「仏説阿弥陀経」について、現存する『阿弥陀経』の漢訳には、平素私たちが依用している鳩摩羅什による訳と、玄奘の訳した『称讚浄土仏撰受経』との二訳が残っています。また、サンスクリット本もあり、その経題は、「Sukha vatī-vyūha」で、古来「楽有莊嚴」の意と言われています。「楽有莊嚴」とは、仏教は、「抜苦与楽（苦しみを抜き、楽を与える）」の教えですから、「苦しみを抜き、楽を与えるという阿弥陀仏のはたらきがあらわれているすがた」という意味です。つまりは、楽を与えるというはたらきが、具体的にかたちになったものとして示された説法ですから、これを最初から、「お伽話だ」とか、「実体的だ」とか言っていたら、釈尊の仏意は届きません。釈尊の、切なるお心を頂戴していく姿勢が大切になってきます。

■訳者

訳者「鳩摩羅什」（三四四―四一三。一説に三五〇―四〇九）は、中国訳経史の上で、真谛・玄奘・不空とともに四大訳家とされています。西域の龜茲国に生れ、前秦国の西域征討によっ



【阿弥陀経】の説法が行われた祇園精舎の遺跡

てとらわれの身となりますが、四〇一年に長安に招かれ、仏典翻訳に大きな足跡を残しました。「姚秦」の「秦」とは、五胡十六国時代の中国の国名で、「前秦」（三五―三九四）と「後秦」（三八四―四一七）と西秦（三八五―四三二）がありますが、この場合は「後秦」国のことです。「姚」は、後秦の国王「姚興」のことで、後秦国の時代に、姚興の命によって訳されたことが表されています。

■序分（証信序）

どの経典も、基本的に、序分・正宗分・流通分の三段にわかれます。論文や手紙などを、序論・本論・結論の形式で書くのと同様です。この内、序分が、さらに証信序と発起序にわかれます。

最初は証信序。これは、どの経典にも必ず存在し、要件も共通していることから「通序」とも言います（これに対し、発起序は、その経典固有の経緯を示すので「別序」とも言います）。証信序は、その経典が信じるに足るものであることを証明する部分です。具体的には「六事成就」といわれる、信成就・聞成就・時成就・主成就・処成就・衆成就の六事が整って、初めて経典として成立します。

最初の「如是我聞（かくのごとく、われ聞きたてまつりき）」の「如是」が「信成就」、「我聞」が「聞成就」です。これは、阿難が「聞いたまま」を申し述べていること、すなわち釈尊のご説法のままであつて、阿難の私見は微塵も入っていないことが披瀝されているのです。阿難の私見が混入したら、釈尊の説法として承認されませんので、これが必要要件となっているのです。

阿難も私見を挿まなかつたように、拝読する私たちも私見を挿んではなりません。曇鸞大師の『往生論註』には、「経の始めに〈如是〉と称するは、信を能入となすことを彰す」（七祖一五七頁）と述べてあります。

宗祖親鸞聖人は、『教行信証』『総序』に、
撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ
(一三三頁)

と述べておられます。せっかく真実の言葉、世に超え勝れた教えに遇いながら、私たちが、凡夫の論理で、「ああでもない」、「こうでもない」と「遅慮」しているのを厳しく戒めておられます。「浄土なんて本当にあるのだろうか」、「念仏一つでさとりをひらくなんて本当にできるのだろうか」と、仏の世界のことを、凡夫の論理で勝手に心配します。この「遅慮」が、何に起因す

るかを、同じく総序の文に、

もしまたこのたび疑網に覆蔽せられれば、かへつてまた曠劫を経歴せん

(同頁)

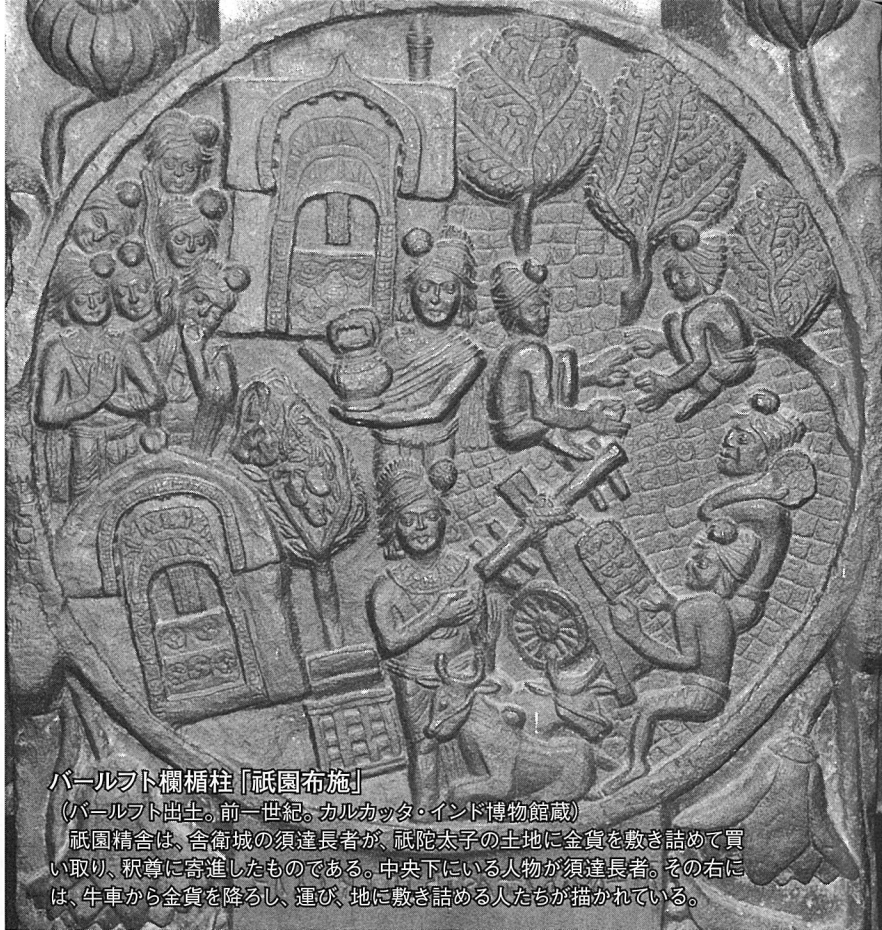
と、「疑網」によると示して下さっています。

虫でも魚でも、網にかかったら抜け出せません。私たちも、疑いという網にかかったら、他力の法に遇えず、生死を抜けることができないのです。そして、この「疑網」は、私たち自身が作っています。蜘蛛は、自分の口から糸を出して網を作り、獲物を捕えます。蜘蛛は、自分で作った網に、自分でかかるような間抜けなことはしません、私たち人間は、自分で作った網に自分で引っかかっているのです。

網は、通例、縦糸と横糸を編んで作りますが、私たちの「疑網」は、「理性」という縦糸と、「感性」という横糸で作るのです。自分の理性や感性に合うものは受け入れ、合わないものは拒否します。こういう自力の網にかかる、他力の法には遇えません。

時成就の「一時(ひととき)」とは、「ひととき」「ある時」といつたくらいの意味ですが、漫然とした「ある時」ではなく、説法の機縁が熟した「一時」です。

主成就の「仏」とは、この経の説法主が釈尊であることを表



パールト欄楯柱「祇園布施」

(パールト出土。前一世紀。カルカッタ・インド博物館蔵)

祇園精舎は、舎衛城の須達長者が、祇陀太子の土地に金貨を敷き詰めて買い取り、釈尊に寄進したものである。中央下にいる人物が須達長者。その右には、牛車から金貨を降らし、運び、地に敷き詰める人たちが描かれている。

衆成就では、「大比丘の衆」以下、沢山の弟子の名前が列挙されています。この弟子たちは、釈尊滅後の經典の編集会議にも同席し、經典の内容に間違いがないことの、いわば証人の役目をしました。

「千二百五十人と俱なりき」。釈尊の説法の会座に列なる対告衆の数として、この「千二百五十人」という数字は、他の経

しています。

処成就の「舎衛国の祇樹給孤独園」は、この説法が行われた場所を示しています。コーサラ国の首都・舎衛国(城)の長者

(富豪)であった須達は、孤児や身よりのない独り暮らしの人への施しを喜んでしていたので、「給孤独長者」と呼び親しまれていました。「給孤独」とは、「孤児や独り暮らしの人に給施する」という意味です。須達はマガダ国の王舎城でたまたま釈尊に出会い、「自分の地元にも道場を建てて、釈尊をお招きしたい」と考えました。説法の道場としては、騒々しい所は適しませんし、不便な所でも多くの人に来てもらえませんか。最適だと思われた場所は、コーサラ国王の王子、祇陀太子の所有地でした。須達の散財を惜しまない熱意に根負けし、さらに、その尊い目的を知った祇陀太子は深く感動し、土地を売り渡すとともに、その樹木を寄進すると申し出ました。こうして完成した道場です。祇陀太子の樹木(祇樹)と、須達(給孤独)長者の土地(園)という名がつけられ、一般には「祇園精舎」と呼び習わしています。そして、この祇園精舎の場所の選定などに、ひととき尽力したのが舍利弗でしたから、『阿彌陀経』の説法では、何度も、「舍利弗よ」と釈尊が呼びかけておられるのではないかと私は味わっています。

典にもよく出てきます。優楼頻羅迦葉・那提迦葉・伽耶迦葉が、釈尊との神通力の勝負に負けて、千人の弟子を引き連れて入門し、舍利弗と目連が、それまで六師外道のサンジャヤの門下から、二百五十人の門弟とともに入門したのを合せた総数が千二百五十人です。彼らは新参者の立場でしたが、むしろそれだけに、説法の会座には、必ずといってよいほど聴聞していたのです。私たちの聴聞の姿勢も、あらためて反省させられるものがありますね。

「舍利弗」以下、阿羅漢や菩薩など、多くの対告衆の名前が挙がりますが、ここで、クイズを一つ。一人だけ、この序分で実名が挙がらず、他の所で挙がっている人がいますが、誰でしょう？そして、その方は、どこに名前が挙がっているのでしょうか？少し考えて、探してみてください。「そんな人がいるのか」と当惑されたかも知れませんが、答えは、「阿修羅」です。玄奘訳では、序分のところに、ちゃんと「阿素洛」という名が挙がっています。この鳩摩羅什訳では、序分にはなく、最後の流通分に「一切世間天人阿修羅等」として、確かに会座に列なっていたことがわかります。最後にだけ載っているのは、遅刻でもしたのでしょうか。いいえ、そうではありません。実は、この阿修羅と、序分に「釈提桓因」の名前で登場する帝釈天

とは、不仲だったとされているのです。阿修羅は帝釈天に、ひどいことをされたと伝えられています。だから、この二人を一緒に並べることを避けたのではないのでしょうか。これは訳経者の配慮です。鳩摩羅什は、この二人のいきさつについての故事にまで精通していたからこそその配慮だと思えます。さすがは名翻訳家ですね。しかし、実際は、聴聞の会座においては、それまでの恨みつらみは捨てて、同じく座をともにしていたわけですから、私たちも、聴聞の場では、日頃の世間での個人的感情は、さっぱり流して、ともにみ教えを喜んでいきたいものです。

■無問自説の経

通例、「証信序」の後には、「發起序」が置かれます。証信序が六事成就という共通の形式であることから「通序」とも言いますが、経典には、それぞれの説法が説かれた固有のいきさつがあり、それを「別序」とも称しています。たとえば、「大経」では、釈尊の姿がいつもと違うことに気付いた阿難の問いがあつて、その問いに答えられ、「観経」であれば、韋提希の問いによって説法がなされたという固有の事情があります。こういった個別の経緯が示されるのが發起序で、通常どの経典にもあるものです。ところが、この『阿弥陀経』には、

發起序に相当する部分がなく、証信序の後は、直ちに「その時、仏、長老舍利弗に告げたまはく」と、舍利弗に向かつての説法が始まります。すなわち、正宗分に入っているのです。これが「無問自説の経」と称される、『阿弥陀経』の特別な地位を表しています。

釈尊は、何故、誰かの問いを待たずに説法を始められたのでしょうか。それは、「問いを待つてはおられない」、「この経だけは、どうしても説いておかねばならない」という強い思いがあつたからだと思われれます。「この経だけは、どうしても遺しておかねばならない」。まさしく遺言のような思いがあつたからに他なりません。『阿弥陀経』が、釈尊ご一代の結論の経典（「二代結経」）と言われる理由の一端は、この点にあるでしょう。（昔の講録では、対告衆に「迦留陀夷」の名があることから釈尊最晩年の説法＝一代結経と考えていましたが、近年の研究からは、晩年に聴聞を許されたとされるウダーインと迦留陀夷とは別人ではないかと言われています）

「無問自説」には、もう一つ大切な意味があります。「誰かの問いを待たずに説く」という「随自意（自らの本意にしたがう）」の視点から、この『阿弥陀経』の真实性の根拠が知られるということになります。親鸞聖人は、『一念多念文意』に、次のように示



祇園精舎のアーナンダ菩提樹

しておられます。

この『経』は、無問自説経と申す。この『経』を説きたまひしに、如来に問ひたてまつる人もなし。これすなはち釈尊出世の本懐をあらはさんとおぼしめすゆゑに、無問自説と申すなり（六八六頁）

この経は無問自説の経という。この経をお説きになるにあたっては、釈尊に問いをおこした人もなく、自らお説きになったのである。これは、釈尊がこの世に出られた本意を明らかにしようとお思いになったからであり、そのようなわけで無問自説というのである

（現代語版『一念多念文意』、一三三頁）

『阿弥陀経』が出世本懐の経典だということが、無問自説の形で説かれていることによつて知られるのです。もちろん『無量寿経』が出世本懐の経であることは、ご存知の通りです。

学習のポイント

- (1) 親鸞聖人は、『阿弥陀経』をどのような視点で読んでいたか。
- (2) 『阿弥陀経』が、問いを待たずに説かれたというところから、どんなことが読み取れるでしょうか。『阿弥陀経』を説かれた釈尊のお気持ちをまとめてみましょう。